「クリンクル」の現代クラフトの巨匠に習う

小松誠
プロダクトデザイナー

プロダクトデザイナーの小松誠先生による講座が三日間、開催されました。鋳込み技法を勉強し、制作するワークショップです。

一日目
「何でもやきものにしてしまう—粘土のしみ込ませ」

三日間とも、午前はスライドレクチャーからです。小松先生がご自分の作品について紹介してくださいます。「35 年前に初めて製品化されたものです」と、今でも販売されている真っ白な灰皿が映されました。代表作「皺のシリーズ(クリンクルシリーズ)」では、紙をクシャクシャにしたものを石膏型にうつし換え、焼き物にしたもの。

作品は、実際にクシャクシャの紙袋が置いてあるかのようです。スーパーバッグシリーズでは、滑らかな紙袋形も紹介されました。

「土は焼成時に変形するため、いかに制御していくかが本来のポイント。その歪みも利用している」とのことでした。「型があればコピーが出来ることが非常に面白い。コピー性が故に現代の文化が発達している、ということがある」。ものづくりの世界ではコピーは非常にマイナーなイメージがありますが、逆にそのコピー性を魅せることを、創作に取り入れられているようです。小松先生のお仕事は、素材が偶然につくる表情を活かし、デザインに取り込むことも特徴で、手わざを極力排した美しい造形です。歪んだり、ヒビが入ったり、縮んだりと、素材を活かして、今回みなさんにも制作していただきます。

スライドを見た後、ギャラリーに並ぶサンプルを見学しました。ティッシュやスポンジなどに、流動性のある磁土(泥しょう)を染込ませて焼成したものです。焼いて布は消失してしまい、土だけが残ることに驚きの声があがりました。

午後からは、キッチンペーパーや軍手などを材料に、自由に制作します。素材を探しに散策される方や、持ち物から見つける方も。アドバイスを受けながら、集中して制作し、あっという間にたくさんの作品ができていきました。

サンプルを手に、素材の説明を聞きました。軍手やタワシ、スポンジや紙などです。印刷された紙には、焼成後に文字まで残っているものもあり、みなさんを驚かせました。

泥しょうという、ドロドロの粘土を染込ませた軍手です。スポンジを握っているものもあります。これは、二週間ほど乾燥させてから、1250度で焼成します。

二日目
「鋳込みの醍醐味—揺すって、叩いて、器づくり」

本日の内容は、器を作って自由に歪ませる、というものです。小松先生がコップや花器の石膏型に、泥しょうを流し込んでいきます。その際、鋳込み技法はフランスの国立セーブル製陶所で確立されたことや日本に伝わったのはウィーンの万国博覧会で、それから普及してきた新しい技法であることなどを教えていただきました。

午後のみなさんの制作では、シンプルなコップに、人の手の形をした取っ手や、足を取り付けるアイディアを紹介されました。人の手足は小松先生オリジナルの型から生み出されます。これは、二日目と三日目のワークショップで用います。コップの下に足を付けると、まるで足が生えているようで、奇抜な作品が完成しました。

また、本日の大切な技法は「揺すって、叩いて」です。コップの歪ませたいところを湿らせて、歪ませないところを乾燥させることがポイントです。ビニール袋を用いてマスキングし、霧吹きで湿らせ、次に、その他の部分にドライヤーを当て乾燥させます。その後作品を木の板に置いて、トントン叩いて歪ませていきます。微振動を与えて、液状化現象を起こしているのです。二日目も参加の人は、染込ませ技法もコップに応用して、自由に制作されていました。終了後、残って小松先生のお話を聞く方もあり、勉強熱心な様子がうかがえました。

実際にクシャクシャの紙袋や、それから取った原形、外型を紹介。技法解説に真剣に聞き入ります。筒が付いているものは圧力鋳込み、通常は排泥鋳込みです。

ビニール袋をマスキングに使用し、霧吹きとドライヤーで水分を調節。作品を乗せた板を叩くと、徐々に歪んできました。目からウロコの技法に「おぉーっ」と感動の声。

三日目
「ちょっと高度な、鋳込み講座—おもしろ技術の総合」

最初のスライドレクチャーは、技法について説明を受けました。紙袋から原型を起こして外型を取ること、その外型に泥しょうを流し込む作業、泥しょうを出して乾燥収縮した作品が型から外れるところ、などです。また、水分と珪酸ソーダを土に入れると、流動性のある土になることを紹介されます。昨日習った排泥鋳込み(口元から余分な泥しょうを流し出す技法)を行いつつ、新たに圧力鋳込みも案内されました。小さな丸い穴に長い筒を付けて泥しょうを流し込むと、圧力がかかり、お皿のような薄い面にも土が流れ込む、という仕組みです。

本日の作業紹介では、コップを切り刻んで解体した後、再び構成して置物にすること。また、土の板を作り、コップの口もとに貼り付けて塞ぎ、さらに穴を開けて花器にするアイディアを披露されました。軍手に染込ませるときには、「触りながら素材を知り、発見していきます。とにかくやってみることが一番、そこから生み出すものが多くある」と、工芸の特徴を語られました。

お昼休み後、鋳込んだコップを思い思いに切り取り、組み立て、変形していきました。三日目のこともあり、今までの技法を総合させて取り組み、オリジナルの作品が生み出されました。最後にそれぞれ、小松先生に完成作品を見ていただき、終了です。

性別年齢、さまざまな方たちが熱心に参加されて、楽しい手ごたえを得た貴重な三日間の講座でした。

三日間で習った技法を駆使して、作品に挑みます。コップを切り刻んだり、布やティッシュに泥しょうを染込ませたり。オリジナル作品を展開していきました。

歪ませたコップ、手や足が付いたもの、タオルやスポンジに染込ませたもの。様々な作品が生み出されました。届いた完成作品で、さっそくお茶を飲んで楽しまれた方も。